

月例研究会（2018年9月7日）

## 非国民な女たち

——戦時下の洋装とパーマメント・ブーム

飯田 未希

報告者が現在調査中である戦時期の女性洋装の普及について、本研究会で中間的な報告を行った。このテーマは、2018年3月に出版された『戦時期の労働と生活』（法政大学大原社会問題研究所／榎一江編著）に収められた報告者の論文（「パーマメント報国と木炭パーマ——なぜ戦時中にパーマメントは広がり続けたのか」）を単行本化するにあたり、議論の枠組みを同時代のファッション全体に広げたものである。研究会では本のプロポーザル（仮題：『非国民な女たち』）を提示し、議論の整合性などについて出席者に意見を問うた。プロポーザルは①総動員体制の中で、国民精神総動員運動（精動）婦人部はなぜ女性のファッションを問題化したか、②戦時期におけるパーマメントの普及、③戦時期の洋装の普及という構成である。本研究会では①の精動婦人部による女性ファッションの問題化と③の洋装の広がりに関する議論を中心とした。

まず①のなぜ女性知識人たちが、女性の「外見」（髪形、化粧、服装など）を「排撃」の対象としたのかという点であるが、女性の髪形や洋装の流行が「享乐的」なものとして精動婦人部や各種婦人団体に攻撃されるようになったのは、そもそも女性が政治においても経済活動においても周縁化される中で、精動婦人部が女性たちに呼びかけた「活動的であれ」という主張が非常に曖昧かつ抽象的なものにとどまったからであるというのが本研究の主張である。女性ファッ

ションは「報国的活動」＝「正しさ」からの逸脱を可視化する指標としての役割を与えられた。

③の女性洋装の議論は、精動婦人部など指導者層による流行への価値づけをメディアや女性たちが実際に受け入れていたのかを問うものである。特に(a)メディア（特に服飾研究家）がどのように洋装やモンペを解釈したのか、(b)隣組常会や女子青年団などの集まりの中で、参加した女性たちは服装に対してどのような意識を持っていたのか、という点に焦点を当てた。メディアはモンペを報国的な「正しい服装」と位置づける一方、服飾研究家らの「モンペは見苦しい」という主張も掲載していた。服飾研究家は「モンペ」＝「醜」と「洋装」＝「美」を対置させ、服装が判断されるべき基準は「正しさ」（＝「報国的」）ではなく、「美しさ」であることを主張し、自分たちの職業的な権威を守ろうとした。また女学校、隣組常会、女子青年団などに参加する女性たちは、それらの場で「おしゃれ競争」をしていたことが記録されており、「報国的」な下部組織として位置づけ直されていた個々の場が、参加する女性たちにファッションを通じて再領有されていたことを指摘した。

本発表について、複数の出席者から洋装の議論とパーマメントの議論の齟齬について指摘を受けた。洋装もパーマメントも「戦時期の広がり」を分析することを目的としているが、洋装に関しては新聞や婦人雑誌など大手一般メディアを主要な資料としているのに対し、パーマメントに関しては、関連業者の伝記や業界誌などパーマメントの「生産」に携わった人々による記録を主要な資料としている。洋装の分析が「消費」ないし「表象」寄りになっているという指摘は、この資料の違いのためである可能性が高い。議論の枠組みそのものに非常に大きな影響を与える問題であるため、早急に見直しを行う予定である。

（いいだ・みき 立命館大学政策科学部准教授）